

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第 68 号
平成 28 年 10 月
生涯学習課

展示期間（図書館休館日は除く）
平成 28 年 10 月 4 日（火）
～ 29 年 1 月 8 日（日）
※展示期間中に展示替えを行います

西国街道と人々の暮らし

地域の歴史的な景観が、まちづくりや地域の個性・魅力発信の資源として注目されています。市域東部を南北に縦断する西国街道も、こうした素材の一つとして挙げることができます。西国街道は西宮で中国街道と接続する、近世の幹線道路として知られ、街道筋の地域の人々に親しまれているところです。しかし、本市においては、西国街道に関する歴史資料の残存状況から、街道沿いの様子、かつてのくらしぶりについては、これまでよくわかっていませんでした。そこで本展では、断片的ながらも伝来した史料から、近世の市域における西国街道の様子、人々のくらしについて、垣間見たいと思います。

西国街道

西国街道は、京都七口の一つ、東寺口を起点として西宮に至る脇往還で、山崎（大山崎町）・芥川（高槻市）・郡山（茨木市）・瀬川（箕面市）・昆陽（伊丹市）には宿駅が設けられました。本市は「一里塚」の地名が残ることからもわかるように、京都から程近く、東寺口から2里目（約8km）に当たります。

一般的に、かつての道路名称は、同じものを指した場合でも、地域によって様々で、西国街道も馬場・神足・友岡では「山崎街道」、調子では「京阪街道」、今里では「山陽街道」と呼び習わしていたようです。その成立は古く、10世紀前半には入洛の通路として確認されますが、現在にも連なる街道として拡張・整備されたのは、16世紀末と考えられています。

延宝年間（1673-80）の検地帳には、文禄・慶長の役の際に道として築造、今に至っていると記載されています。また、江戸後期以前の年紀を有する絵図類で、西国街道を専ら「唐海道」と注記していることから、その契機は豊臣秀吉による朝鮮出兵のための軍勢や物資の輸送であったようです。



延宝7年（1679）神足村検地帳（部分）
教育委員会所蔵
道成の項目に面積・年貢高に並んで、「是八文禄元辰年高麗御陣之時道二成、於尔今道有之二付、如斯」との注記が見える。

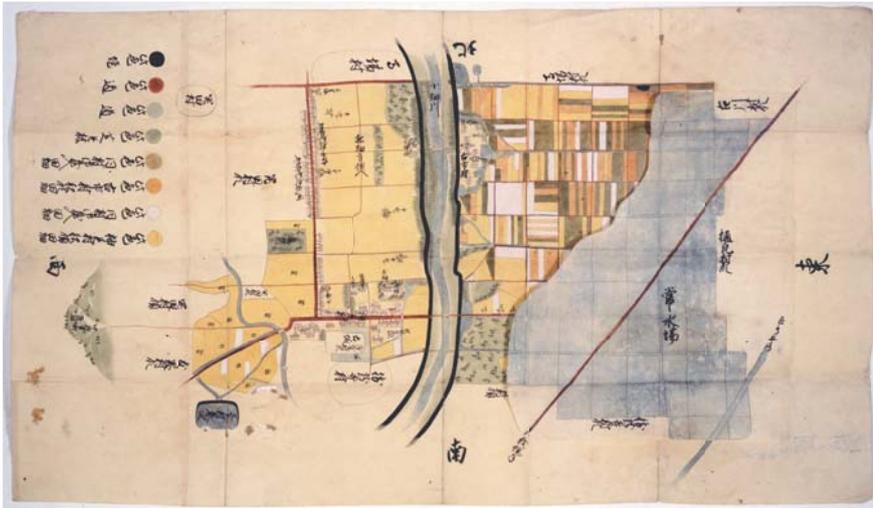
街道沿いの景観

昭和30年代以降、急激な都市化・宅地化を経て、本市の景観も大きく変貌しました。省線（JR東海道本線）が開通、昭和6年（1931）の神足駅（長岡京駅）開設に至って、積極的な工場誘致による西国街道東側の開発が進みましたが、明治期は近世から続く集落の他、街道沿いに家屋が軒を連ねる程度でした。

絵図類の描写から、近世の様相も明治期とさほど変わらず、街道に面して家屋が建ち並んだようですが、その裏手には畑地が広がっていました。また、こうした家並みが周囲の馬場・開田・古市

・神足・友岡・調子各村の出屋敷として形成されていたこともわかります。

整備されたとはいえ、宿駅が設定されなかった当地において、西国街道沿いが一定の町場となった起源は、永井直清の入部にあったと考えられます。寛永10年（1633）3月上方支配のため、將軍徳川秀忠の側近であった直清に勝龍寺城が与えられ、淀城に入った兄尚政とともにその任に当たります。7月、直清は勝龍寺城の北方で新たに神足館を築造しました。それは、長岡京駅の南側に位置し、「京口」・「茶屋口」の虎口で西国街道と接続していました。この頃の来住にかかる史料もまとまって伝来していることから、城下経営のなかで町場化しつつあったようです。



(年未詳) 古市村・神足村絵図
(市指定文化財) 教育委員会所蔵
古市・神足各村の領域と田畑、入会山・共有池、西国街道・久我縄手など主要な道路について記載された絵図。
制作年やその背景は不明ながら、錯綜する領有状況を描き分け、「常水場」を付箋で明示していることから、貢租関係を把握する目的で作成されたと思われる。
小畑川西にある南北道路の南東角に「老里塚」が見える。ここから南へ「神足村」まで、さらに西の「友岡村領」へ、犬川を渡る道が西国街道である。
街道沿いに「古市村出屋敷」・「開田村出屋敷」の家屋が描かれるが、神足村のものは東側のみで、旧石田家住宅（神足ふれあい町家）が立地した西側は「畑」となっており、家屋は描かれない。本絵図は、未だ家並みが続いていなかったころのものと考えられる。

街道沿いにくらす人々

国替えからわずか16年、慶安2年（1649）9月直清は高槻へ転封になります。それにともない、元禄年間（1688-1703）までには神足館跡は畑地になりましたが、街道沿いの家並みは存続したようで、古市・神足では17世紀後半から18世紀前半20軒程度、調子では17世紀中ごろ5軒、友岡では17世紀後半から18世紀後半にかけて20軒程度が出屋敷に所在していました。

これらは、古市では寛政7年（1795）樽屋・油屋・指物屋・松屋・壺屋・河内屋・鍛冶屋・石橋・筵屋といった屋号が確認され、友岡の出屋敷では文政2年（1819）質店、酒・醤油の小売業、林業、木綿加工业・諸進物・木綿の卸売業を営んでいたことがわかり、多岐にわたる業種、物品を取り扱う商店であったことが明らかになりました。

ただし、専業ではなかったようで、古市の出屋敷に所在する、商家で使用されていた家財道具を書き上げた史料には、商売で用いられたであろう掛硯・銭箱、調度品である鍋・壺・戸棚などと並んで、稲扱き・犁といった農具も散見され、農業経営にも従事したと考えられます。それは、街道に東面し、現在も往時の姿を残す国登録文化財旧石田家住宅（神足ふれあい町家）が、「通り庭」で表と奥を土間で結び、店舗と住まいを兼ねつつも、内部は田の字づくりと農家のつくりになっていることから窺えます。



文政10年（1827）「家諸道具売上ヶ帳」個人蔵